

親鸞の名号本尊

寺川俊昭

一

日常の宗教生活のなかで、本尊は礼拝・讃嘆・供養等の所依として重要な意義をもつものであることは、いうまでもない。その本尊について今私が尋ねたいのは、名号を以て本尊とした親鸞の場合である。同時代、法然門下の同輩の多くが、来迎の阿弥陀像を以て本尊としたと伝えられる中であって、彼は木像あるいは絵像の本尊に簡んで名号を本尊としたのであるが、現存する真蹟尊号本尊五幅をみるに、六字名号一幅、八字・九字名号各一幅、十字名号二幅となっている。親鸞の真蹟尊号はこれ以外に勿論あり得るとしても、たまたま現存する五幅の尊号が、浄土教の歴史を通して阿弥陀仏のみ名として親しまれて来た、梵音を保

存する南無阿弥陀仏の六字名号よりも、むしろ南無不可思議光あるいは歸命尽十尺方無碍光如来をより多く本尊として掲げていることは、ある積極的な意義をもつことが思われるのである。

勿論親鸞は「南無阿弥陀仏、往生之業念仏為本」の旗印のもとに、専修念仏を高らかに唱えた法然にはぐくまれた仏教者として、南無阿弥陀仏として念仏に親しんでいたことはいまでもない。

称名は則ちこれ最勝真妙の正業なり、正業は則ちこれ念仏なり、念仏は則ちこれ南無阿弥陀仏なり、南無阿弥陀仏は即ちこれ正念なりと、知るべしと。(『行巻』)

だから例えば『歎異抄』に繰返して語られている念仏とは、南無阿弥陀仏という言葉を以て如来のみ名を称すること

とに外ならず、親鸞もまた、浄土教の長い歴史が選んだこの言葉を、本願の名号として仰ぎ、この南無阿弥陀仏に於いて称名憶念したのであった。

ところが周知のように、親鸞は「行巻」の劈頭に、大行について、

大行とは則ち無碍光如来の名を称するなり。

と定義し、更に真の報仏・報土を開顕する「真仏土巻」には、

謹んで真仏土を按ずれば、仏は則ちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。

と、無碍光如来、不可思議光如来という言葉をも以て、如来のみ名を語っている。無碍光如来のみ名を称するのは、無論南無阿弥陀仏と称するのであるが、大行としての念仏を南無阿弥陀仏と端的に表現せず、無碍光如来の名を称するなりと定義しているところには、親鸞の微妙な配慮乃至は含蓄といったものがあるといふべきであろう。

同じ配慮を私は、例えば親鸞の仮名聖教の類のなかにも見出す。そこでは如来の尊号を南無阿弥陀仏としつつも、この名号あるいは阿弥陀という言葉を単独で語ることは稀で、ほとんどの場合あの無碍光如来あるいは不可思議光仏の名を、いわば南無阿弥陀仏の義を明かすという形で同時

に記し、かつこれを展開しているのである。

『如来尊号甚分明』、このところは『如来』と申すは無碍光如来なり。『尊号』といふは南無阿弥陀仏なり。

『尊』はたふとくすぐれたりとなり。『号』は仏になりたまうて後の御名を申す、『名』はいまだ仏になりたまはぬときの御名を申すなり。この如来の尊号は不可称・不可説・不可思議にまします故に、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲の誓の御名なり。(『唯信鈔文意』)

尽十方無碍光如来と申すは、即ち阿弥陀如来なり。この如来は光明なり。尽十方といふは、尽はつくすといふ、ことごとくいふ。十方世界を尽くして悉くみち給へるなり。無碍といふは、さはることなしとなり。衆生の煩惱悪業に碍へられざるなり。光如来と申すは阿弥陀仏なり。この如来は即ち不可思議光仏と申す。この如来は智慧の相なり、十方微塵刹土にみちたまへると知るべしとなり。(『尊号真像銘文』)

この事実の意味するところを尋ねてみるに、親鸞の信仰的自覚の核心である本願の名号は、端的には勿論南無阿弥陀仏という言葉で表現されるのであり、そこに浄土教の伝統がある。それと共に親鸞は、根本經典である『大無量寿

經』の教説に依つて告白された天親の帰命尽十方無碍光如来を、本願の信の最も純潔にして正確な表現として受け止め、この言葉を以て本願の名号の意味乃至は内容を表わすものとしてうなづいていと解してよいのであろう。

二

一体何故に親鸞はこのような配慮をしたのであろうか。一言でいえば、本願の名号の自覚性を確保するためであった、と私は解する。このことをよりよく理解するために、われわれは親鸞の時代の宗教的状况というものに、十分の注意を払うべきであらう。勿論ひとえに善導の指南をうけてであるが、伝統の南無阿弥陀仏を以て、選択本願の念仏であるからこそ正しく仏道の行であるとしたのが、法然の鮮明な歴史的主張であった。法然の専修念仏を仏道の行として意味づけていたものは、「順彼仏願故」という善導の言葉にいみじくも告白されている、法然における本願への随順であったことはいうまでもない。ただ法然はこの本願の信を内に秘めて、諸行に対して念仏一行を選び取るという、いわゆる行々相對の形でその信仰的自覚を鮮烈に表現したのであった。この点からいえば、諸行を廃捨して称名念仏一行のみを選び取るという選びの明確さによって、念

仏の仏道性が確保されていたのだということも許されよう。とすれば、念仏を内から本願の行として支えている本願の信が衰弱し、あるいは諸行に対する念仏の緊張関係が弛緩するならば、念仏はやがて諸行としての念仏一般に後退し、本願の名号という独自性を喪失するという問題性を露呈することとなる。注意すべきは、法然の専修念仏も諸行の随一としての念仏も、言葉としては同一の南無阿弥陀仏であつて、何の区別もないということである。私が親鸞の時代の宗教的状况を視野のうちに入れるべきというのは、このところであつて、念仏を含めて仏教の行全体が、日本の古代末期の精神界に雑草のように繁茂し続けている、呪術的宗教の風土の中に埋没して行かざるを得ない状況があつたという事態への留意である。その状況は、親鸞が『愚禿悲歎述懐』のなかで仏道の外道への転落として指摘する通りである。

五濁増のしるしには、この世の道俗ごとごとく、外儀は仏教のすがたにて、内心外道を帰敬せり。かなしきかなや道俗の、良時吉日えらばしめ、天神地祇をあがめつつ、卜占祭祀つとめとす。

仏道の行が仏道の行としての自覚性を保持することができず、いい換えれば人間の暗い迷妄性に根ざす呪術宗教

的要求を自覺的に破り転ずることができず、その意味で直接的な呪術⇨宗教的要求に即応しつつ、仏道の行という形を保ちながらその行自体が呪術的、超自然的功力をもつものとして理解され、且つ期待される。そのような形で仏道が外道に転落して止まるところを知らぬのが、法然・親鸞等の仏教者がその思想的事業を果し遂げて行った時代の、宗教的状况であったのではなからうか。親鸞が当時の伝統的仏教である聖道仏教を、「行証久しく廢れ」といい、「已に時を失し機に乖く」と批判し続け、更に都の教養人に対しても、「行に迷ふて邪正の道路をわきまふることなし」と厳しくいい切ったのは、このような実態を凝視し、指摘しているに外ならない。

仏道の行一般がこのような運命のもとにあるとするならば、念仏という行も亦、この根強い原始的心性である呪術的宗教性の侵蝕を受けることは、免れがたい。戒師として数多くの人々に結縁した法然の上にも、受戒による験を期待するという形で、この呪術的宗教性の影がさしていたのかも知れない。そして、もし状況をこのように把握するならば、法然が決然とした廢立の姿勢を以て諸行を廢捨して選択本願の念仏を選び取り、親鸞がその念仏を本願の名号に根源化したのは、念仏そのものの呪術化を拒否しつつ、

あの密林のような呪術的宗教性に対する真向からの挑戦であったのであり、かつ又、自覺的な仏道の行を回復するという意味をもった事実であったのだと、私は解するのである。それは無自覺のままに外道化した伝統仏教に対する激しい抗議であり、日本の精神史上初めて原始的宗教性の迷妄を破って仏教の智慧の清閑な世界に人間を自覚させて行く、何か精神の黎明を告げるような意義をもった事業であった。親鸞が名号を記す時に、ただ南無阿弥陀念だけを以てせず、より多く婦命尽十方無碍光如来のみ名を記し、門弟に送った仮名聖教のなかでは、無碍光如来あるいは不可思議光如来を以て阿弥陀仏の意味を明らかにしつつ語ったあの配慮は、このような視点に立つ時、ほぼ正確に理解することができるのではあるまいか。のみならず、親鸞が同じ「専修念仏の輩」として友同行の交りをつ結んだのは、親鸞自身が「文字の意を知らぬ、あさましき愚癡きはまりなき、いなかの人々」と記した、関東の辺境の地に住む人々であったことを想起すれば、この努力のもつ積極的意義を、われわれは十分に評価することができるのである。

三

親鸞は名号本尊の上下に、意味深い一二の経論の言葉を

無量寿如来会言
若我成仏国中有
情若不決定成等
正覺証大涅槃
者不取菩提

婦命尽十方無碍光如来

無量寿経優婆
提舍願生偈曰
世尊我一心婦命尽十方
無碍光如来願生安樂国
我依修多羅真実功德相
説願偈忽持与仏教相応
愚禿親鸞敬信尊号
八十四歳書之

(専修寺蔵)

大無量寿経言
設我得仏十方
世界無量諸仏不
悉咨嗟称我名
者不取正覺

南無不可思議光仏

又言
我建超世願必至無上道
斯願不満足誓不成正覺
我於無量劫不為大施主
普濟諸貧窮誓不成正覺
我至成仏道名声超十方
究竟靡所聞誓不成正覺
愚禿親鸞敬信尊号
八十四歳書之

(専修寺蔵)

書き記した。従つて實際の名号本尊は、例えば上のような形式のものである。

ここに掲げた四つの名号本尊は、康元元年十月、八十四才の老親鸞が書き記したものであるが、名号と共にそれに附せられた讃文を私は注意したい。讃としてここに記されているのは、第十一必至滅度の願、第十二光明無量の願、第十三壽命無量の願、第十七諸仏称揚の願、第十八至心信樂の願であり、更に「重誓偈」の文、『大経下巻』積尊の勧誡の文及び「願生偈」の文が選び出されて記されている。同種類の銘文については、われわれは『尊号真像銘文』によつてほぼその全てを知ることができるのであるが、今この名号本尊に添えられたこれらの銘文を閉目開目して憶念する時、婦命尽十方無碍光如来と表白された親鸞の信仰の自覚の面目が、次第にはっきりと浮き彫りになって来るのを、私は感ずる。

これらの銘文のなかで本願の文についていえば、親鸞が四十八願中真実六願として選んだ本願の中で、第二十二還相廻向の願を除く五つの願が、ここに掲げられていることに注意したい。こ

大無量寿経言

設我得仏光明有能限量

下至不照百千億那由他諸

仏国者不取正覚

設我得仏寿命有能限量下

至百千億那由他劫者不取

正覚

康元元丙辰十月廿八日

書之

婦命尽十方

無碍光如来

婆藪般豆菩薩曰

世尊我一心婦命尽十方

無碍光如来願生安樂国

我依修多羅真實功德相

說願偈愬持与仏教相應

親仏本願力遇無空過者

能令速満足功德大宝海

愚禿親鸞敬信尊号

八十四歳書之

(妙源寺藏)

大無量寿経言

設我得仏十方衆生至心信樂

欲生我国乃至十念若不生者

不取正覚唯除五逆誹謗正

法

設我得仏国中人天不住定

聚必至滅度者不取正覚

愚禿親鸞敬信尊号

八十四歳書之

又言

必得超絶去往生安

養国横截五惡趣

惡趣自然閉昇道

無窮極易往而無

人其国不逆違自

然之所牽

康元元丙辰十月廿八日

書之

(西本願寺藏)

の五つの本願の意義を概略尋ねるならば、十二、十三願はいうまでもなく無量寿仏あるいは無碍光仏としての如来自身の成就を誓われた本願であり、同時に親鸞の了解によれば無量光明土としての眞実報土の根拠となる本願である。その眞実報土が無上涅槃の世界であり、それ故に眞実報土の生をうけることは直ちに証大涅槃を意味することが誓われたのが、第十一願である。そして、如来の名そのものを以て、その眞実報土を衆生に開く行とすることを誓われたのが第十七願である。この諸仏咨嗟の如来の名号に喚び覚まされた願生浄土の心、しかもその浄土が無上涅槃の世界であるからこそ、証大涅槃の眞因である本願の信の成就を誓われたものが、改めていうまでもなく第十八願である。

この本願と完全な対応をしながら、名号本尊の下端に意味深い讃文が記されている。本願の心を若し一言で表わすならば、それこそ「我於無量劫、不為大施主、普濟諸貧苦、誓不成正覚」に極まるのであらう。この悲願に支えられて無上仏道を衆生に成就する法こそ、あの如来の名号であ

る。この「重誓偈」をうけて、その名号によって衆生が還歸し行く安樂浄土が無為自然の大涅槃の世界であること、『大経』の「横截五惡趣」の文によって、親鸞は確認するのであった。そしてこの名号に喚び覚まされ、のみならずまさしく本願が衆生における事実として実現したという意味をもち、端的に帰命尽十方無碍光如来と表白される一心帰命の心は、教主世尊の真説である『無量寿経』の教説の恩徳によって開かれた宗教的自覚に外ならず、しかもこの一心帰命において、如来の不虚作住持の功德が現行しているという、感動に満ちた確信を親鸞は天親の『願生偈』に読み取ったに違いない。まさしく帰命尽十方無碍光如来として一心帰命の心を表白するこの『願生偈』を、名号本尊の讃文として親鸞は書きつけていたのである。

前掲の、同一日もしくはあまり日をへだてずに書かれたと思われる四つの名号本尊について、一々の本尊に記された讃文は、上下の二文であるけれども、それらを通観するならば、親鸞はこれらの讃文において、親鸞自らが獲得した仏道である浄土真宗の根幹ともいえるべきものを表わす経言を選んで、南無阿弥陀仏乃至は帰命尽十方無碍光如来という名号が象徴的に表現する浄土真宗の宗教的自覚の内容を明記したのだということを、われわれは知ることができ

る。あるいはむしろ、これらの経言に支えられ、表現される宗教的自覚の世界を、浄土真宗と呼ぶのだといった方が適切であるかも知れない。だからこのような様式をもった親鸞独自の名号本尊のみる時、それは、前節で考察したような親鸞のあの独創的な配慮の見事な表現であると共に、親鸞が名号という時、その名号のもつ積極的にして自覚的な意味を明確にせずにはおれなかった親鸞の情熱の、具体的な結実であったことが、ある圧倒的な印象をもって私に迫って来るのである。

如来のみ名は、南無阿弥陀仏によって表わされる。だが、それは単なる名ではない。況んや呪言ではない。ある自覚的な意味をもった言葉である。この一事を明確にするために、親鸞は伝統の南無阿弥陀仏の六字名号のみならず、更に漢訳されてその意味を直覚的に知ることのできる、南無不可思議光仏乃至は帰命尽十方無碍光如来の九字、十字の名号を以て、如来のみ名を表わす言葉としたのであった。恐らくは親鸞の信仰的自覚そのものが、南無阿弥陀仏よりもむしろ、阿弥陀の名義によってその名を得た帰命尽十方無碍光如来という名号に、その積極的にして正確な表現を見出し、親しむものをもっていったというべきであろう。

それに加えて親鸞は、その名号に本願の根本精神を表わ

す意味深い讃文を附することによって、その名号がまさしく本願の名号であることを、ある清澄な明確さを以て明らかにし了つたのである。このような名号本尊に接することによって、そしてこのような名号を称念することによって、われわれは直ちに如来大悲の本願を憶念することができ、その時、この名号はむしろ如来そのものの名告りとして、称念する者をして一つの深い信仰的自覚の世界に喚び覚ますものとなる。そこにこの名号本尊が、何か感動的な香気を湛えている所以があるのではなからうか。

四

例えば前掲の名号本尊の中、上部に十七願文を、下部に「重誓偈」の文を記した九字名号を見よう。この本尊はわれわれに、親鸞にとつては南無不思議光仏とは十七願成就の如来のみ名に外ならないことを、告げている。この名号を仰ぐ親鸞は、実はその時、十方無量の諸仏の咨嗟称名を聞く一人の衆生に外ならなかった。如来の名号に、十方諸仏の称讃を聞く。親鸞の信仰的自覚においては、名号とは称せられるべきものであると共に、むしろそれ以上に聞かれるべきものであった。阿弥陀の名号において、聞名と称名とは一如である。より正確には、称名に先立って聞名

があり、その聞名にはぐくまれて衆生の称名は誕生するのである。その光景は『大無量寿経』自身がいみじくも、

十方恒沙の諸仏如来、皆共に無量寿仏の威神功德の不可思議なることを讃嘆したまう。諸有の衆生、其の名号を聞きて、信心歓喜せんこと乃至一念せん。

と語る通りであり、更に親鸞自身の自証として、

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏申さんと思いたつ心のおこるとき、即ち撰取捨の利益にあづけしめたまふなり。

と告白される如くである。

かつての日、一乗止観の学場よりさきよい出た精神界の孤児親鸞は、その彷徨の闇の中から、あの、
ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし。

という恩厚なる師教に値遇することによって、始めて念仏者として尽十方無碍光なる世界に蘇つたのであった。親鸞のこの経験こそが、彼が凡そ名号を語る時その立脚点となつたものに外なるまい。そしてこの経験は、『大無量寿経』の「願成就の文」の教説、あるいは『願生偈』に表白された天親の本願の信を、親鸞自身が追体験したものであると解することができよう。しかし、より正確には、親鸞自身

が名号に蘇ったあの感動と謝念に満ちた光景が、既に願成就の出来事として教説され、本願成就の一心として表白されている事実を、新たなる感銘と共に親鸞はこれらの聖典の中に読み取ったというべきであらうか。この経験の自証に、あの、

我、仏道を成ずるに至りて、名声十方に超えん、究竟して聞ゆる所なくば、誓いて正覚を成ぜじ。

という本願が今十方の諸仏によって称讃される名号となつて現行し、響流しているのであった。この光景が即ち、親鸞が如来の名号を、十七願成就のみ名として仰ぎ、かつ了解して来る根拠ともなったものである。

親鸞の強靱な思索は、このように名号に諸仏の称讃を聞き当てたに止まらず、更にその名号がまさしく名号である所以を、根源にまで溯って明らかにすることとなった。それが善導の名号解釈を指南して展開した、あの親鸞独自の名号釈である。

爾れば南無の言は帰命なり。(乃至)是を以て、帰命は本願招喚の勅命なり。発願廻向というは、如来已に発願して衆生の行を廻施したまうの心なり。即是其行というは、即ち選択本願これなり。

このような名号解釈が獲得された時、帰命尽十方無碍光

如来という如来の名号は、十方諸仏の称讃する如来の名であると共に、より根源的に如来そのものの名告りであり、如来が衆生の上に事実として自己を現行せしめたものという意味をもつ言葉として了解されることとなったのである。

実はここに、名号を以て本尊とするという独自の形式の本尊を、親鸞が創出した最も大切な理由があったのではなからうか。だから、親鸞のこの独自の名号解釈を踏まえて、帰命尽十方無碍光如来という名号本尊を敬信する親鸞の内面に尋ね入るならば、無碍光如来のみ名を称する者として尽十方無碍光においてある自己を獲得した彼の信仰的自覚は、その自覚の深みにおいて、外ならぬその名号に如来の至心信樂欲生我国の叫びを聞き当てていたのであると、われわれは確かにいうことができるであらう。

五

この本願の信仰的自覚が、尽十方無碍光如来に帰する者を願生道に立たしめる。それは親鸞が、

欲生我国といふは、他力の至心信樂をもって安樂浄土へ生れむと思へとなり。

といい、

本願の業因にひかれて自然に安樂に生るるなり。

本願力に乗ずれば本願の実報土に生るること疑ひなければ行き易きなり。〔尊号真像銘文〕

と語る通りである。しかし、今は、ここに引いた「必得超絶去」の文と共に、親鸞が四幅の名号本尊に第十一願文を二文も讃していることに注意したい。因みに先ず、彼の「必得超絶去」の註釈をみよう。

昇道無窮極といふは、昇はのぼるといふ。のぼるといふは無上涅槃にいたる、これを昇といふなり。道は大涅槃道なり。無窮極といふは、きはまりなしといふ。

(乃至) 眞実信を得たる人は大願業力の故に自然に浄土の業因たがはずして彼の業力にひかるる故に、往き易く無上大涅槃にのぼるにきわまりなしとのたまへるなり。〔尊号真像銘文〕

この註釈に見事に語られているように、大涅槃道に立つことと、それが親鸞の信仰的自覚の究極的関心であったのである。そこに親鸞が名号に第十一願文を讃した理由がある。

だから、帰命尽十方無碍光如来と表白される本願の信仰的自覚は、親鸞においては証大涅槃の真因と了解されているのであり、成等覚証大涅槃が名号の喚び覚ます願生道の志向する究極の意味となる。本願の信は、まっすぐに無上涅槃に連っている。それは往生即成仏というような教義学的

解釈ではなく、それよりもっと端的にしてみずみずしい、一心帰命の信において三界の道に勝過した廣大無辺際の世界が分別を破って開示されたという、本願の信の鮮明な自証である。私はここで再び、小論の最初に引いた『唯信鈔文意』に記されている、親鸞の独自に見事な名号解釈に耳を傾けたい。

その如來の尊号は不可稱・不可説・不可思議にまします故に、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲の誓の御名なり。

ここに語られている名号不思議については、それが浄土の不虛作住持功德と深い関係をもつ事柄であると了解して、私見を述べたことがあるが、〔誓願不思議——親鸞聖人の宗教的自覚の特質——〕『親鸞教学』第十八号所収〕今改めて注意したいのは、名号不思議という道理を踏まえて、如來の尊号を以て直ちに一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめる、大悲の御名であるとする親鸞の了解である。改めていうまでもなく、念仏を以て往生浄土の道とするのは、浄土教の伝統である。親鸞も亦この念仏往生の伝統にはぐくまれた仏教者として、念仏を往生浄土の道として了解していたことは、例えば『歎異抄』第二章に疑う余地なく明瞭に語られている通りである。ただしその場合、親鸞にお

いてはこの念仏がむしろ名号に根源化して把握されて来たことと並行して、往生も亦、むしろ願生道と呼ぶにふさわしいものに内面化して了解されて来たことも、周知の通りである。しかし、念仏を往生浄土の行として把握するにせよ、名号において真実報土が衆生に開示されると了解するにせよ、名号はいわば浄土と一対をなす法であることは、間違いない。名号こそ衆生の願往生心の満たされる法であると了解するところに、浄土教の基本的立場がある。にも拘わらず、親鸞が例えば『唯信鈔文意』に展開した名号解釈は、願往生の法として名号を把握するという立場を更に根源化して、名号こそ衆生をして無上大般涅槃に還帰せしめる無上の法であるとする、端的にして確信に溢れたものであった。恐らくはこの辺りに、晩年の親鸞が到達した最も確実な名号観があるのではなからうか。同じ確信を表明している、今一つの名号解釈を聞こう。

今一乗と申すは本願なり。円融と申すは、よろづの功德善根みち／＼て闕くることなし、自在なる意なり。無碍と申すは、煩惱、悪業にさへられず破れぬといふなり。真実功德と申すは名号なり。一実真如の妙理円満せるが故に、大宝海に譬へたまふなり。一実真如と申すは無上涅槃なり、涅槃すなはち法性なり、法性す

なはち如来なり。宝海と申すは、よろづの衆生をきらず障りなく隔てず導きたまふを、大海の水のへだてなきに譬へたまへるなり。この一如宝海より形をあらはして法藏菩薩となのりたまひて、無碍の誓をおこし給ふをたねとして、阿弥陀仏となりたまふが故に、報身如来と申すなり、これを尽十方無碍光仏と名けたてまつれるなり、この如来を南無不可思議光仏とも申すなり、この如来を方便法身とは申すなり、方便と申すは、形をあらはし御名を示して衆生に知らしめたまふを申すなり、すなはち阿弥陀仏なり。この如来は光明なり、光明は智慧なり、智慧は光のかたちなり、智慧また形なければ不可思議光仏と申すなり。この如来、また形なければ不可思議光仏と申すなり。この如来、十方微塵世界にみち／＼たまへるが故に無辺光仏と申す。然れば世親菩薩は尽十方無碍光如来と名けたてまつりたまへり。(『一念多念証文』)

晩年の親鸞の代表的著作、即ち『尊号真像銘文』、『一念多念証文』及び『唯信鈔文意』を、ほぼ同時代の親鸞の法語を収録した『歎異抄』と比較する時、われわれはこの両者の間に顕著な違いを見出すことができる。それは前者には証大涅槃という主題が反復繚説され、むしろこの一事がこれらの著作を一貫する基調ともいべき関心とさえいえる

のであるが、これに対して『歎異抄』にはこの証大涅槃という主題が、全く語られていないという事実である。この事実は『歎異抄』の性格を尋ねて行く場合、十分に考慮すべき事柄であるが、少くとも親鸞がその思索を自ら筆を執って書き表わしたこれらの著作に、晩年の親鸞が積極的に取組んだ主題、むしろ漸く到達し、明確な自覚にまで高められた信境が、くつきりと浮き彫りになっていることは、言を待たまい。この証大涅槃という一語で端的に表わすことのできる無上仏道の信仰的自覚の確信が、これまで尋ねて来ねて来たような意味深い経言を讃文として添えてある、独自の様式を以て創出された名号本尊の思想的背景となっているのである。従って自らが獲得した本願の信を帰命尽十方無碍光如来と表白した親鸞は、まさしくこの言葉を以て表わされる如来の名号を本尊として敬信する時、そこに十方諸仏の称讃する如来の尊号を、大きな感動の中で聴聞する独りの群萌であった。のみならずその名号を聴聞する親鸞は、この者仏の称讃に発遣せられて、全法界に響流する如来自身の名告りを、その精神界の深みに聞き当っていたのである。その名告りはむしろ、一如法界の顕現として、光りに満ちた莊嚴な世界を衆生に開示するはたらくきであった。恐らくはここに、親鸞が最後に到達した浄土

真宗の内実があるといつてよいのであろう。重複するようであるが、この莊嚴なる念仏の自内証を表白する、『唯信鈔文意』の文を引いて、小論の結びとしたい。

涅槃をば滅度といふ、無為といふ、安楽といふ、実相といふ、法身といふ、法性といふ、真如といふ、一如といふ、仏性といふ、仏性すなわち如来なり。この如来微塵世界にみち／＼たまへり、すなわち一切群生海の心なり、この心に誓願を信樂するがゆへに、この信心すなわち仏性なり、仏性すなわち法性なり、法性すなわち法身なり。法身はいろもなし、かたちもましまさず。しかればころもおよばれずことばもたへたり。この一如よりかたちをあらわして、方便法身とまうす御すがたをしめして、法蔵比丘となりたまひて、不可思議の大誓願をおこしてあらわれたまふ御かたちをば、世親菩薩は尽十方無碍光如来となづけたまひたりたまへり。この如来を報身とまふす、誓願の業因にむくひたまへるゆへに報身如来とまふすなり。報とまふすはたねにむくひたるなり、この報身より応・化等の無量無数の身をあらはして、微塵世界に無碍の智慧光をはなしめたまふゆへに尽十方無碍光仏とまふすひかりにて、かたちもましまさず、いろもましまさず、

無明のやみをはらひ悪業にさえられず、このゆへに無碍はさわりなしとまふす、しかれば阿弥陀仏は光明な

り、光明は智慧のかたちなりとするべし。

(本学助教、真宗学)